

中国人名の現地読み——メディアの現状と課題

藤野 彰

■先行した韓国人名の現地読み

先日、あるテレビ番組に日中間のニュース解説者として出演した際、事前の打ち合わせの場でキャスターの女性から、「中国の首相の温家宝さんは中国式に読まなければいけないんですって？」と尋ねられた。「いや、日本式に『おん・かほう』と読めばいいんですよ」と答えたが、日々、時事ニュースに触れているはずの彼女が一瞬、「あれ、どっちだったかな？」と頭をひねってしまった理由はわかる気がした。

というのは、日本のマスメディアの世界では、現在、韓国・朝鮮人名を「李明博（イ・ミョンバク）」「金正日（キム・ジョンイル）」というように現地読みするの

が一般的なのに対し、中国・台湾人名については通常、「胡锦涛（こ・きんとう）」「馬英九（ば・えいきゅう）」というように日本語読みしているからである。

中国も朝鮮半島も同じ東アジアの漢字文化圏なのに、日本における、それぞれの固有名詞（特に人名・地名）の読み方はチグハグである。加えて、後述するように一部メディア（朝日新聞）は、中国・台湾人名を日本語読みせず、「胡锦涛（フー・チンタオ）」「馬英九（マー・インチュウ）」という具合に現地音のルビをふっている。どうやら、メディア界における読み方の不統一が、情報の受け手のみにとどまらず、情報の発信者にさえも、戸惑いや混乱をもたらしてしまっているようだ。

本稿は、中国・台湾（香港、華人世界も含む）の固有名詞の読みをどうするかというのが論考の主旨である。もっと具体的に言えば、日本語読みのままでいいのか、あるいは現地読みを積極的に導入すべきか、それを導入するとすれば、どんな課題が存在するのか——等々の問題を検討することにある。筆者は長年、ジャーナリストとして中国報道に携わっているが、メディアの現場からの個人的見解であることを、まずお断りしておきたい。

さて、ここで確認しておきたいのは、韓国人名を現地音で表記するようになった経緯である。日本の主要メディアの中国現地読みの動きが出始めたのは、韓国

の金斗煥大統領が韓国元首として初めて日本を公式訪問した一九八四年のことだ。訪日二カ月前の七月、当時の安倍外相が韓国人や中国人の名前を公式発表文書において現地読みするように外務省に指示し、一部メディアがこれにならう形で韓国人名の現地読みに踏み切った。背景には韓国政府からの日本政府、メディアへの要望があった。言葉は悪いが、一種の「外圧」を受けての対応と言えなくもなく、結果的に多くのメディアが追随した。

しかし、当時、メディア側は中国人名の現地読みは見送った。韓国との間では、相互主義（韓国では「田中角栄」を「タナカ・カクエイ」と日本式に読むので、日本側も「金斗煥」を「チョン・ドゥホアン」と韓国

式に読む）が大義名分として成り立つが、日中間にはそういう関係が存在しない。例えば、日本側は「鄧小平」を「とう・しょうへい」、中国側は「田中角栄」を「テイエンジョン・ジアオロン」と、各々の流儀で読んでいる。中国側から、現地音で読んで欲しいという要請もない。おそらく、こうした事情を考慮して、各メディアとも「中国人名の現地読みは時期尚早」との判断に至ったと思われる。

■相互主義と技術的問題

韓国・朝鮮人名については、四半世紀余の実験を経て、今や現地読みがほぼ浸透している。では、中国・台湾人名の読みに関して、主要メディアの現在の表記

規則はどうなっているのか。ルールが対照的な読売新聞と朝日新聞のケースを取り上げて比較してみよう。表記規則の引用は『読売スタイルブック 2011』（二〇一一年三月、中央公論新社）と『朝日新聞の用語の手引』（二〇一〇年二月、朝日新聞出版）に拠る。

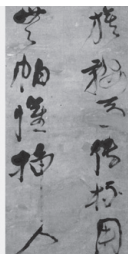
【読売新聞】

① 中国人の名は原則として原表記の漢字で書く。中国の簡体字はその字に対応する日本の漢字に改める。

② 人名に難しい漢字がある場合は読み仮名（ルビ）を付ける。

③ 中国、台湾関係は、漢字を日本語読みで平仮名を使う。

倪元璐の書法



最新刊

倪元璐の書法

二十歳代から最晩年まで一〇〇点を収録！

吉川蕉仙編

明朝に殉じた烈士で、その人柄と共に氣道に満ちた書を高く評価される倪元璐。あらゆる資料を駆使し、その書百点に年代順の配列を試みた決定版。詳細な「倪元璐伝」と明末五家対照年表を付載する。

A4判・函入・280頁●5040円（税込）



二玄社

東京都文京区本駒込6-2-1
Tel.03-5395-0511 <http://nigensha.co.jp>

【朝日新聞】

① 中国、台湾の人名は原則として漢字で書く。中国の簡体字は日本字に直して書く。

② 中国、台湾人名の読み仮名は、特定の要人や著名人に限って付ける。難解な漢字の人名、人もの記事など、読み仮名が必要な場合は柔軟に対応する。

③ 読み仮名は現地音を用い、中国、台湾とも標準音（北京語）による。香港における広東語など、特定の方言によるのが自然な場合はその限りでない。現地音の読みを示す場合は片仮名で書く。

両者を比べてみて、大きく異なるのは③である。「読売方式」では伝統的な「日本語読みの平仮名ルビ」となっているのに対し、「朝日方式」では「現地音の片仮名ルビ」となっている。メディア界全体を見渡してみると、現状における圧倒的多数派は「読売方式」であり、全国紙の中では「朝日方式」を採用しているのは朝日新聞以外にはない。つまり、今のところ「朝日方式」は他の主要メディア

が追従するものとはなっておらず、「胡锦涛（フー・チンタオ）」「馬英九（マー・イチウ）」が一般化しているという状況は見られない。

朝日新聞が他紙に先駆けて「現地音の片仮名ルビ」を試験的に導入したのは二〇〇二年のことだ。同年二月五日付朝刊の「朝日新聞紙面審議会」特集によると、委員の間から中国人名の表記について「現地読みの片仮名でルビをふってほしい。『こ・きんとう』と日本流に読んでも国際的には通じない」との要望があり、これを受けて外報部長が「自国の人が相手国でどう呼ばれているかという相互主義の原則がある。ただ、現地読みがあった方が親切という考え方もあり、日中復交三〇年の連載ではこれを試みた」と語っている。翌年の朝日紙面を見ると、二月中旬から恒常的に要人名にルビを振っており、新しい試みが本格始動したことがわかる。

「朝日方式」がスタートしてから、かれこれ一〇年近くになるが、他メディアの反応が鈍いのはなぜだろうか。理由は

いくつか考えられる。

第一は、やはり相互主義的な発想である。中国では、日本の人名・地名を、まったくの中国語読みで発音している。中国語には片仮名、平仮名、ハングルのような表音文字が存在しないので現地読みが困難という特殊事情があるが、普通の中国人は「高倉健」を「ガオ・ツァンジン」、「山口百恵」を「シャンコウ・バイファイ」と呼んで何ら違和感や疑問を覚えない。一方、日本人が「毛沢東（マオ・ゾウトン）」を「もう・たくとう」、「周恩来（ジョウ・エンライ）」を「しゅう・おんらい」と呼び続けることに、中国人は至って寛容である。

仮に、中国側から中国人名の現地読みの要請があったとすれば、メディアの反応は違ったかもしれない。だが、現実にはそのような要請はなかったし、今もない。もとより、日本側は中国に日本人名の日本語読みは求めている。日中双方とも、長年の慣行に不都合はないのではないかというムードが支配的である。要するに、大半のメディアは中国人名の現

地読みを「差し迫った課題」とは認識していないということだ。

第二には、表記上の技術的問題がある。

一口に現地読みと言っても、中国人名の発音は、韓国人名よりもはるかに多様かつ複雑である。どんな人名であれ、標準語（普通話）の発音に基づいて表記すれば事足りるというものではない。広東語、客家語、台湾語など各方言による現地読みをしなければならぬケースも多々あり、正確に使い分けることは中国方言学の専門家でもない限り、まず不可能である。「朝日方式」が「読み仮名は、特定の要人や著名人に限って付ける」と定めているのは、対象を絞らずに拡大してしまうと対応が追いつかないし、紙面も煩

雑になるという実際の理由によるものであろう。

■国際化が求める現地読み

では、今後も将来にわたって「日本語読み」のままでもいいのであろうか。筆者は、日本人（あるいは日本語のわかる人）の間でしか通用しない「日本語読み」だけでは、時代のニーズに応えられない、と考える。アメリカ人も、インド人も、アフリカ人も「胡锦涛」を「Hu Jintao（フー・チンタオ）」と呼んでいるのに、「こ・きんとう」という読み方しか知らないのでは、日進月歩の国際化と情報化に対応できないのではなからうか。いくら英語が達者でも、頭の中に「こ・

きんとう」としかインプットされていないければ、外国人とは話が通じない。「Who is Hu?」のシャレもわからない。

その意味では、各メディアはもつと前向きに現地読みの導入を検討すべきであると思うが、そのためには解決すべき問題がある。以下、簡条書きで列挙しておく。

①片仮名表記をどう行うか。現状では、それが必要な場合、中国問題担当記者の判断で表記を決めるケースが多い。だが、これでは不統一は避けがたい。また、各メディアが勝手にルールを定めれば、これも間違いなく混乱を招く。インスター

アジア史入門

—日本人の常識

斎藤道彦 著 古代から現代まで、特に日本と関係が深い近現代東アジア史に重点を置き、国際的知識として現代を生きる若い日本人、大学生・社会人に知ってほしい「アジア史」全体を概説。索引付

A5判 ■ 3045円

東アジア文学史比較論

趙東一 著
豊福健二 訳

本書は先行するヨーロッパの文学史と東アジア各国文学史の計99種について詳細な検討と比較考察を行い、東アジア文学史樹立への道を探ろうとするものである。

A5判 ■ 9870円

近代東アジアにおける文体の変遷

形式と内実の相克を超えて

沈国威 内田慶市 編著
「文体」をキーワードとして、言語、文学など様々な角度からのアプローチによる論文11本を収録。

A5判 ■ 5040円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

ネットでの検索にも支障が出る。日本新聞協会など業界団体が何らかの指針を取りまとめるといったような対応も検討していく必要がある。

②現在、同一メディア内においても日本語読み、現地読みの不統一が生じている。新聞の国際面などで日本語読みしている一方、文化・芸能面では「張芸謀(チャンイーモウ)」「鞏俐(ゴンリ)」「というように著名人の現地読みが一般化している。「チャンイーモウ」や「ゴンリ」はすでに定着したと言ってよく、それなら、なぜ「胡锦涛(フー・チンタオ)」としないのかという矛盾が生じている。

③読者の間には、現地読みへのニーズがある反面、これまで通りの日本語読みにこだわる声も根強い。難漢字を用いている人名について、まず日本式にどう読むのかを知りたいと思うのは当然であり(日本式にきちんと読めるというのが日本人の教養であろう)、活字メディアであれば、ルビを付してその要望に応えなければならぬ。だが、双方のニーズを満たすとするれば、二種類のルビを付けることにな

り、正直煩わしい。

多くのメディアが現地読みを導入した場合、読者(視聴者)からは、賛同意見もあるだろうが、「なぜ日本語読みではないのか」「中国は中国式に読んでいのに、日本だけが現地読みをする必要があるのか」といった反発も予想される。慣れ親しんだやり方が変わるというのは確かに心理的な抵抗感を生む側面がある。

しかし、たとえ日本側からの一方的措置であっても、メリットはある。いたずらに「面倒だ」「煩雑だ」「分かりにくい」と思うのではなく、現地読みによって漢字文化圏の多様性への理解が深まり、日本人の言語文化をより豊かにしてくれると考えるべきではなからうか。頻繁な国際交流とIT革命によって世界は確実に小さくなってきている。これからの時代は、グローバルに文化をとらえ、吸収する力が不可欠だ。

この問題でのメディアの責任は大きい。各メディアにはそれぞれの判断があり、

業界全体の表記を統一するというのはなかなか困難である。しかし、時代の趨勢を見据えて、眼前の課題に取り組んでいかなければならない。その際、京都大学准教授の池田巧氏が発表された「現代中国語カタカナ発音表記法試案」に基づくガイドラインは、建設的で実践的な提案として大いに参考になる。今後の試行錯誤の過程で、メディアの表記に多少のばらつきが存在し続けるにしても、長い目で見れば、いずれ落ち着くところに落ち着いていくのではないかと思う。

最後に、ピンインを知らない素人でも信頼感をもって使えるような一般社会向けの規範的スタイルブック(例えば「中国人名地名 現地音カタカナ表記辞典」が、専門家によって一日も早く編纂されることを望みたい。

(ふじの・あきら 読売新聞東京本社編集委員)

シリーズ「現代中国語のカタカナ発音表記をめぐって」では、「中国語音節表記ガイドライン」[平凡社版](二〇一一年五月) <http://www.heibonsha.com/chi/> をおまえて、今後の課題や関連する問題についてご寄稿いただいております。